フルトヴェングラー不滅の遺産 ～ターラ編～(6CD)

Wilhelm Furtwängler/ Eternal Recordings(1948-1954) (6CD)

CD 1 (KKC-4291) Total Time 64:00

ヨハネス・ブラームス
Johannes Brahms (1833-1897)

交響曲 第4番 ホ短調 作品98
Symphony No. 4 in E Minor, Op. 98

1. 第1楽章：アレグロ・ノン・トロッポ 13:09
   Allegro non troppo
2. 第2楽章：アンダンテ・モデラート 12:36
   Andante moderato
3. 第3楽章：アレグロ・ジョコーソ 6:44
   Allegro giocoso
4. 第4楽章：アレグロ・エネルジーコ・エ・パッショナート 10:05
   AllegroAllegro energico e passionato

ヨハン・セバスティアン・バッハ
Johann Sebastian Bach (1685-1750)

管弦楽組曲 第3番 ニ長調 BWV 1068
Suite no. 3 in D major, BWV 1068

5. I. 序曲 Ouverture 8:04
6. II. アリア Air 6:33
7. III. ガヴォット Gavotte 2:49
8. VI. ブーレ Bourrée 0:54
9. V. ジーグ Gigue 2:32

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
Berlin Philharmonic Orchestra

録音：1948年10月22日 ゲマインデハウス、ダーレム、ベルリン(放送用コンサート)(1-4) 1948年10月24日 ティタニア・パラスト、ベルリン(ライヴ)(5)-(9)

CD 2 (KKC-4292) Total Time 70:18

ヨハネス・ブラームス
Johannes Brahms (1833-1897)

ハイドンの主題による変奏曲 作品56a
Variations on a Theme by Joseph Haydn, Op.56a

1. 主題(アンダンテ) 2:15
   Thème (Andante)
2. 第1変奏 ポコ・ピュウ・アニマート 1:22
   Variation 1 (poco più animato)
3. 第2変奏 ピウ・ヴィヴァーチェ 1:05
   Variation 2 (più vivace)
4. 第3変奏 コン・モト 2:09
   Variation 3 (con moto)
5. 第4変奏 アンダンテ 2:42
   Variation 4 (andante)
6. 第5変奏 ポコ・プレスト 0:57
   Variation 5 (poco presto)
7. 第6変奏 ヴィヴァーチェ 1:29
   Variation 6 (vivace)
8. 第7変奏 グラツィオーソ 3:12
   Variation 7 (grazioso)
9. 第8変奏 プレスト・ノン・トロッポ 1:05
   Variation 8 (presto non troppo)
10. 終曲 アンダンテ 4:16
    Finale (andante)

交響曲 第1番 ハ短調 作品68
Symphony No.1 in C Minor, Op.68

11. 第1楽章：ウン・ポーコ・ソステヌート－アレグロ 14:46
    Un poco sostenuto-Allegro
12. 第2楽章：アンダンテ・ソステヌート 10:46
    Andante sostenuto
13. 第3楽章：ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ 5:22
    Un poco allegretto e grazioso
14. 第4楽章：アダージョ－アレグロ・マ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ 17:38
    Adagio - Allegro ma non troppo ma con brio

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
Berlin Philharmonic Orchestra

録音：1954年5月4日 オペラ座、パリ(ライヴ)(1-10)
1952年2月10日ティタニア・パラスト、ベルリン(ライヴ)(11-14)

CD 3 (KKC-4293) Total Time 63:10

モーリス・ラヴェル
Maurice Ravel (1875-1937)

高雅にして感傷的なワルツ～リハーサル
Valses nobles et sentimentales～Rehearsal

1. 部分練習 20:46
   Part practice
   全曲通し演奏
   Practice through all parts～
2. モデレ(中庸の速さで) 1:24
   Assez lent
3. アッセ・ラン(かなりゆるやかに) 2:23
   Assez lent
4. モデレ(中庸の速さで) 1:22
   Modéré
5. アッセ・アニメ(十分に生き生きと) 2:23
   Assez animé
6. プレスク・ラン(ほとんどゆるやかに) 1:18
   Presque lent
7. アッセ・ヴィッ(かなり活発に) 1:16
   Assez vif
8. モワン・ヴィッ(活発さを減じて) 3:34
   Moins vif
9. エピローグ－レント(ゆるやかに) 3:51
   Epilogue - Lent

イーゴル・ストラヴィンスキー
Igor Stravinsky (1882-1971)

バレエ音楽「妖精の口づけ」よりの交響組曲(ディヴェルティメント) 24:26
Symhonic Suite from "Le Baiser de la fée" (Divertimento)

10. 第1楽章：シンフォニア (アンダンテ) 6:32
    Sinfonia (Andante)
11. 第2楽章：スイス舞曲 7:05
    Danses Suisses
12. 第3楽章：スケルツォ 3:40
    Scherzo
13. 第4楽章：パ・ド・ドゥ 7:17
    Pas de deux

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
Berlin Philharmonic Orchestra

録音：1953年4月15日 NWDR(北西ドイツ放送)スタジオ、ベルリン(1-9) 1953年5月18日 ティタニア・パラスト、ベルリン(ライヴ)(10)-(13)

CD 4 (KKC-4294) Total Time 58:09

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

交響曲 第3番 変ホ長調 作品55「英雄」
Symphony No.3 in E Flat Major, Op.55 "Eroica"

1 第1楽章：アレグロ・コン・ブリオ 16:13
Allegro con brio

2 第2楽章：葬送行進曲(アダージョ・アッサイ) 17:49
Marcia funebre (Adagio assai)

3 第3楽章：スケルツォ(アレグロ・ヴィヴァーチェ) 6:17
Scherzo (Allegro vivace)

4 第4楽章：フィナーレ(アレグロ・モルト) 12:39
Finale (Allegro molto)

録音：1947年11月10,11,12,17日 ムジークフェラインザール、ウィーン Matrix 2VH 7068-1, 7069-1, 7070-4, 7073-2, 7074-2, 7075-2, 7076-1, 7077-1, 7078-1, 7079-2, 7080-1, 7081-1, 7082-4

5 **第2楽章冒頭の再録音** 4:48
Beginning of 2nd Mov.

録音：1949年2月15日 ブラームスザール、ウィーン Matrix 2VH 7074-5
(注)HMVのSPには第5面がマトリックスナンバーがオリジナルテイク2VH 7074-2と再テイク2VH 7074-5の2種があったが、その後旧EMI系のCD用マスターにはもっぱら再テイクが使用されている。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
Vienna Philharmonic Orchestra

CD 5 (KKC-4295) Total Time 70:36

フェリックス・メンデルスゾーン
Felix Mendelssohn (1809-1847)

1 **序曲「フィンガルの洞窟」作品26** 9:49
The Hebrides, Op. 26

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

アイネ・クライネ・ナハトムジークK.525
Eine Kleine Nachtmusik K.525

2 第1楽章：アレグロ 4:17
Allegro

3 第2楽章：ロマンス アンダンテ 4:43
Romance. Andante

4 第3楽章：メヌエット アレグレット 2:10
Menuet. Allegretto

5 第4楽章：ロンド アレグロ 2:57
Rondo. Allegro

ヨハン・シュトラウス2世
Johann Strauss II (1825-1899)

6 **皇帝円舞曲** 9:29
Emperor Waltz

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

交響曲 第4番 変ロ長調 作品60
Symphony No. 4 in B-Flat Major, Op. 60

7 第1楽章：アダージョーアレグロ・ヴィヴァーチェ 10:47
Adagio - Allegro vivace

8 第2楽章：アダージョ 12:14
Adagio

9 第3楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ 5:52
Allegro vivace

10 第4楽章：アレグロ・マ・ノン・トロッポ 7:23
Allegro ma non troppo

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
Vienna Philharmonic Orchestra

録音：1949年2月15日 ブラームスザール、ウィーン[HMV DB 6941](1)、1949年4月1日 ムジークフェラインザール、ウィーン[HMV DB 6911-6912](2-5)、1950年1月24日 ムジークフェラインザール、ウィーン [HMV DB 21174](6)、1950年1月25,30日ムジークフェラインザール、ウィーン [HMV DB 9524-9528](7-10)
Matrices: 2VH 7108-4, 7109-5 (1) 、2VH 7159-1～7162-1 (2-5)、2VH 7202-1A、7203-1C (6)、2VH 7204/7(1月25日), 2VH 7208/13(1月30日) (7-10)

CD 6 (KKC-4296) Total Time 58:06

ベドルジーハ・スメタナ
Bedrich Smetana (1824-1884)

1 **交響詩「モルダウ」** 12:30
Moldau(Vltava)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

交響曲 第7番 イ長調 作品92
Symphony No. 7 in A Major, Op. 92

2 第1楽章：ポコ・ソステヌートーヴィヴァーチェ 13:37
Poco sostenuto - Vivace

3 第2楽章：アレグレット 10:25
Allegretto

4 第3楽章：プレスト 8:48
Presto

5 第4楽章：アレグロ・コン・ブリオ 7:00
Allegro con brio

6 **交響曲 第7番 イ長調 ～第2楽章のリハーサル** 6:08
Rehearsal of 2nd Movement of SYMPHONY No.7

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 (1-5)
Vienna Philharmonic Orchestra

ルツェルン祝祭管弦楽団 (6)
Lucerne Festival Orchestra

録音：1951年1月24日 ムジークフェラインザール、ウィーン[HMV DB 9787-9789](1)、1950年1月18,19日ムジークフェラインザール、ウィーン [HMV DB 9516-9520](2-5)、1951年8月15日 クンストハウス、ルツェルン(6)
Matrices: 2VH 7257-3, 7258-3, 7262-3 (1) / 2VH 7180/5(1月18日), 7186/9(1月19日) (2-5)

ヴィルヘルム・フルトヴェングラー(指揮)
Wilhelm Furtwängler

1992年から2014年まで活動したフランスのヒストリカル・レーベル、ターラ。こだわりのある内容は世界中のクラシック・ファンを狂喜させていたが、この6枚組セットはそのターラ原盤によるものである。

ディスクの収録順に触れていこう。**ディスク1**のブラームスの交響曲第4番、1948年10月22日の演奏は1998年、ターラによって初めてオリジナル・マスターからCD化された(FURT1025)。このCDでは場所がティタニア・パラストとあったので、多くの人が同年10月24日のライヴ(EMI系より発売されているもの)と同一ではないかと勘違いしていた。しかしながら、のちに会場はベルリン・ダーレムのゲマインデハウスであり、ライヴではなく放送用の収録と訂正された。

このディスクの10月22日の演奏と同月24日(EMI系)は、ちょっと聴くと全く同じではないかと思うほど似ている。しかし、24日のライヴが乾いた感じで収録されているのに対し、この22日演奏は響きに適度な豊かさが感じられる。

バッハの管弦楽組曲第3番はブラームスの交響曲第4番とは逆で、このセットには10月24日のライヴが収録されている。フルトヴェングラーらしい、実に雄渾なバッハであり、昨今当たり前になっている古楽器風の演奏とは対極となるものであろう。

ディスク2はブラームスの演奏集。まず、「ハイドンの主題による変奏曲」は1954年5月4日、パリ・オペラ座でのライヴである。当日の全演目はターラから1998年にFURT1023~4としてCD化されたが、2009年には「ハイドンの主題による変奏曲」のみが次の交響曲第1番と組み合わされてFURT2005で再発売されている。

このパリ公演はフルトヴェングラーが亡くなる約半年前のもので、やや乾き気味ではあるものの、音質は非常に鮮明である。そのため、最晩年の柔らかく枯れた味わいが非常によく聴き取れる。

フルトヴェングラーの指揮したブラームスの交響曲第1番は、長らく1947年のEMI/HMV録音(ウィーン・フィル)しかカタログになかった。SP用の録音のためか、いかにも気乗りのしない安全運転に徹した演奏は、決してフルトヴェングラーの本領発揮とは言いがたかった。ところが、その渇きをいやしてくれたのが1952年2月10日、ベルリン・フィルとのライヴである。この録音は1976年に初めてドイツ・グラモフォンよりLP化され、同年6月1日には国内でも発売された(ポリドール/ドイツ・グラモフォン　MG6002)。

現在ではフルトヴェングラーの指揮したブラームスの交響曲第1番は11種類(断片も含む)もの演奏がカタログに連なっているが、そのドラマティックで燃え上がるような様子と、変幻自在に変化する表情は、当ライヴが特別に際立っている。

ディスク3ではまずラヴェルが稀少録音である。この「高雅にして感傷的なワルツ」のリハーサルと通し演奏は有名なオールセンのディスコグラフィには掲載されていなかったもので、1997年にターラが初めてCD化(FURT1014~5)している。ただ、この時はピッチがかなり高くなっていたが、その後には修正され、このディスクも正常版が採用されている。

演奏は王道の解釈とは言えないかもしれないが、フルトヴェングラーらしい繊細さと温かく人間的な響きがファンをくすぐるだろう。

日本の指揮界の草分け的な存在だった近衛秀麿は、戦前にフルトヴェングラーの指揮するラヴェルの「ボレロ」を聴き、「まことに見事な演奏」と述懐していた。フルトヴェングラーは戦後、「ボレロ」を一度も指揮していないが、実はベルリン・フィルの1954年1月3~5日の定期演奏会では演目に「ボレロ」が予定されていた。これはフルトヴェングラーが病気のために実現しなかったが、もし予定通り行われていたら、収録された可能性は高かったと思われる。

ストラヴィンスキーの「妖精の口づけ」もまたフルトヴェングラー唯一の録音。フルトヴェングラーとしては軽やかな演奏であり、ラヴェルと同様に温かい響きが特徴的である。ヴァイオリンやチェロのソロにも味がある。

ディスク4。1947年にウィーン・フィルを起用してHMV/EMIに収録されたベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」は、第2楽章の別テイクが長い間"幻"であった。SPからLP初期の頃にはオートマチック・プレーヤーの需要があった(特に若い世代にはなじみが薄いので、ネット上でphonograph automatic changerといった言葉で検索すると動画が見られる)。ところが、第2楽章の第1面がギリギリまでカッティングされていたので、オートチェンジャーで再生すると、面の終わりまで完全に再生出来なかった。そこで、1949年2月にムジークフェラインザールの大ホールではなく、室内楽用のブラームスザールに場所を変え、「なるべく速いテンポで」演奏するように促されて第2楽章の第1面のみが再録音されたのである。

この"幻の別テイク"が広く知られるようになったのは、東芝EMI(当時)が1989年に発売した〈フルトヴェングラーの芸術〉の特典盤として、幻のテイクが収録された8センチのCD(BCDS-1004)を制作した時である。BCDS-1004CDでは屈指のコレクターだった川合四朗提供によるSP盤を復刻に使用しているが、この解説で川合は「10セット以上買って、やっと手に入れることが出来たが、15セット目にやっとこのテイクを物にしたファンもいると聞いている」と書いている。ターラがこの"幻の別テイク"を含めた全曲盤をCD化(FURT1027)したのは1999年である。

ディスク5。メンデルスゾーンの「フィンガルの洞窟」は1930年のベルリン・フィル以来の2度目のセッション録音である。ベルリン・フィル盤ほどの激しさはないが、他の指揮者に比べれば、ずっとドラマティックである。

モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」は1949年のSP録音。フルトヴェングラーはこの曲を演奏会ではあまり指揮する機会がなく、戦後に限って言えば、たとえばベルリン・フィルとはわずか1回である(1949年12月17日、ポツダム)。戦前戦後を通じても、フルトヴェングラーがウィーン・フィルとこの曲を演奏会で指揮したことはなさそうである。

J.シュトラウスの皇帝円舞曲は、このSP録音が唯一の完全全曲演奏である。なお、「ウィーン・フィルえぴ

そーど」(アレクサンダー・ヴィテシュニク著、福原信夫／吉野忠彦共訳、立風書房)には、ある日の演奏会のアンコールで、ウィーン・フィルの楽団員はフルトヴェングラーの仰々しい解釈ではなく、自分たちの流儀で皇帝円舞曲を演奏したという逸話が紹介されている。

ベートーヴェンの交響曲第4番はSPでのみ発売されたが、LP化されたのは1975年10月に東芝EMIから発売された「9大指揮者によるベートーヴェン交響曲全集」(EAC47009～14)が最初であった。しかし、この復刻盤は第1楽章の141小節に欠落があり(SPで言えば第2面の冒頭)、この欠落はのちのCDまで引き継がれた。

このターラによる復刻はそうした欠落はなく、正常である。この第4番は戦時中のベルリン・フィルのライヴ録音と、より音質の良い1952年録音(ウィーン・フィル)との間にはさまれ、一般的にはそれほど騒がれてはないのではなかろうか。しかし、改めて聴くとこの巨大で濃厚なロマンには、圧倒されてしまう。もちろん、この曲にこれほどのドラマが必要なのかと思わないでもないが、この大きなうねりこそフルトヴェングラーの特徴なのである。

ディスク6。スメタナの「モルダウ」は戦後に限っていえば、フルトヴェングラーはこの曲を演奏会では振っていない。演奏は冒頭の遅いフルートの調べでもわかるように、フルトヴェングラーの個性がいかんなく発揮されており、他のどの指揮者よりも陰影の濃い解釈である。

なお、前述のラヴェルの「ボレロ」と同様に、1954年1月3～5日のベルリン・フィルの定期演奏会ではスメタナの歌劇「売られた花嫁」が演目に上がっていたが、フルトヴェングラーの病気により演奏会はキャンセルされている。

ベートーヴェンの交響曲第7番は、フルトヴェングラー・フリークの間では第4楽章に女性の話し声が混入していることで知られている。その経緯は以下のようなものであった。まず、HMVは最初、全曲を磁気テープで収録した。そのテープからSP用の金属原盤が作成され、その時点で磁気テープは破棄された。SPは1951年9月にイギリスで発売されたが、時代はLPへと急速に移行しつつあったため、HMVはSPの金属原盤からLP用のマスターを作成する。この作業中に、女性の声が混入したのである。通常ならば、この混入に気づいてマスターを再度作成するのだが、それが明らかになったのはSP用の金属原盤が破棄されたあとだった。そのため、この“女性の声入り”原盤は世界中で使用し続けられたのである。

女性の声の混入しない演奏はSPから復刻するしかないが、その最初のCDは新星堂のSGR8002(1994年3月発売)だった。このセットはターラが2003年にSPから復刻したもので、同じく女性の声は混入していない。

リハーサルは1974年、フランス・フルトヴェングラー協会が初めてLP化(SWF7401)したものであった。

曲目について

ブラームス：交響曲第4番ホ短調作品98

ブラームス(1833-1897)の最後の交響曲で、1885年の作品。第2楽章には古い教会音階が使用されたり、第4楽章ではバロック時代のパッサカリアが用いられるなど、古い音楽への回帰はいっそう強まっている。初演は1885年10月、マイニンゲンで行われた。曲想が渋いので、初演の時はさほど評判とはならなかったらしいが、この憂愁こそブラームスの真骨頂と高く評価する人も多い。4楽章形式。

バッハ：管弦楽組曲第3番ニ長調BWV. 1068

バッハ(1685-1750)がケーテン宮廷の楽長(1717−1723)時代に書かれたと推定されるもので、バッハのぼう大な作品の中でも最も人気の高いもののひとつ。

ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲作品56a

1873年の作品で、来たるべき交響曲第1番の地ならし的に書かれたもの。冒頭の主題はハイドンではなく、他人のものだという説もあるが、その真偽はともかく、この主題を用い、かくも見事な起伏と色彩感を持った変奏曲を書き上げたブラームスの手腕には驚嘆するしかない。初演は1873年11月、ウィーンにてブラームス自身の指揮で行われた。

ブラームス：交響曲第1番ハ短調作品68

ブラームスは大先輩であるベートーヴェンを強く意識し、最初の交響曲には約20年もの期間が費やされたのは有名な話。この交響曲第1番は1876年11月に初演されたが、その時列席していたハンス・フォン・ビューローは、この曲がベートーヴェンの不滅の9曲に匹敵する傑作という意味で「ベートーヴェンの第10交響曲」という賛辞を表明した。曲は4つの楽章よりなる。

ラヴェル：高雅にして感傷的なワルツ

ラヴェル(1875-1937)はドビュッシーと並ぶ、フランス印象派の巨匠作曲家。この作品はシューベルトを暗示したものと言われているが、1911年にピアノ曲として書かれ、翌年にラヴェル自身によって管弦楽化された。曲は全部で8曲に分かれている。

ストラヴィンスキー：バレエ音楽「妖精の口づけ」よりの交響組曲(デイヴェルティメント)

「妖精の口づけ」はイダ・ルビンステイン夫人の依頼により書かれたバレエで、ストラヴィンスキーがチャイコフスキーのオマージュとして作曲した。アンデルセンの童話をもとにし、妖精が口づけによって若者を奪い取る内容である。バレエは1928年11月、パリで初演されたが、ストラヴィンスキーはのちの演奏会用の交響組曲を編んでいる。

ベートーヴェン：交響曲第3番変ホ長調作品55「英雄」

1804年に初演されたこの交響曲第3番は当初、ナポレオンに捧げるために書き始められたが、そ